

---

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 3 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 3 >

### 【Nコード】

N9706L

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

『記憶鮮明』な青年の姿を探しに新宿へ出かける秀。  
思わぬ出会いが・・・  
MOONシリーズ第3段『WOLF MEET VAMPIRE』  
の第3話です。

W A L F M E E T V A M P I R E < 3 > (前書き)

長いです「¥」お付き合いのほど、よろしくお願い申し上げます。

さやかの話によると、すくなくともこの新宿近辺の事務所に所属するモデルではないという。

彼女のテリトリーは、広尾までと幅広いものだから、

「新人か・・・それとも、ただの一般人じゃない？でも、新人だつたらとくに私の耳にも入ってるはずだし？秀が一度で目をつける程の一般人だしたら、他の事務所だつてもう目をつけてるでしよ？」

確かに・・・満開の夜桜の下でもあれ程『存在感』があるのだから、まして日中の新宿であるのなら・・・

「見逃すはさすがない。」

はずだった。

秀は翌日の午前中、青山での仕事を終えた後、半日の授業を終えた学生でこつた返す新宿へと出かけた。

初夏を思わす風が、街中を駆け巡る。

月並み（セオリーどおり）A L T A前に座り込んで、約1時間。アイドル系の若者は多々いるものの、『彼』程のインパクトはない。

黒いサングラス越しに見かけても、秀は彼ならば決して見逃さない自信があつた。

何か解らないが・・・彼には自分と『同調』するものがあつた。それを、確かめてみたい・・・その想いが彼を惹き付けてやまない。

「はい、秀！そんなところで、何やってんの？」

新宿大通りを歩いていると、対岸の三越前から知り合いの女性連れが、彼に声をかけてくる。「ナンパ？それとも、スカウト？」

「両方!!」

につこり笑って、秀は平然と答える。

「ねえ、君たち!ここらへんで、俺みたいにすつごく美形な男性、見なかった?」

真顔で尋ねる秀の様子に、彼女たちは爆笑した。

「やだ、秀ったら!もう『三丁目』の仲間入り?」

「え?」

と、秀が目を丸くした理由は、彼が”帳”がわりにしていた青山のオフィスからこの新宿のマンションへと移って、まだ3カ月と満たないからである。

「ねえ、どういうこと?」

「そんなこと、真昼間から大声で言えるわけないでしょ! - - -  
じゃね、秀!」

「バイ!」

ミニスカートの素足へすれ違う男性の視線を絡ませながら、彼女たちは駅の方へと去って行った。

「ちえつ。」

秀は軽く舌打ちし、近くのカフェ・バーへと入った。

「テリヤキチキン3つと、モスバーガー2つ - - -あと、ポテトとナゲットとコーヒー。ホットで。」

「...は、はい。」

アルバイトの女子高生は、当店の売上に貢献する若者の顔をまじまじと見つめた。

180cmの身長を有する彼も、モデルとして十分通用する容貌を持つが、そのスレンダーな体格からは、どうしても力バのような胃袋を想像できない。

もし、ここにさやかがいたら、

「秀。ダブルバーガーが抜けてるわよ。」

と、呆れて言ったに違いないが。

店内の眼差しを一身に受けつつ、彼は5分でそれら全てをたいたら

げた。

セブンスターの箱を胸ポケットから取り出し、コーヒ一片手に食後の一服としゃれこむ。「あ。腹減った。」

午後2：00。

街は1日で一番活動的な時間を迎えていた。

歌舞伎町をぶらぶらと、宛てもなく歩いていた時である。

「和人？」

「え？」

ふいに、背後から自分の袖口を掴む者がいた。

確かめるまでもなく、声の持ち主は、女性である。

腰まである長い髪が、秀の顔を見つめると戸惑い気味に大きく揺れた。

「あ……。こめんなさい。遠目に雰囲気を知り合いに似てたから……」

日本人離れた、茶色の大きな瞳である。

「いや、何。気にしてないよ。」

黒いサングラスを軽い挨拶程度にずらして、秀は笑った。「君みたいな美人に声をかけられて、悪い気はしない。」

「ま、照れちゃうな。」

彼女は、子供っぽい笑顔で秀の言葉を受け止めた。女性では背の高い方だろう。

陽に透けると茶色に輝く髪が、秀の肩辺りでジャスミンの香りを漂わせている。

劇場が所狭しと立ち並ぶ、この一角。

わずかに途絶えた人混みが、映画の開演時間を告げていた。

「どう？」

秀は彼女の美しさに、いつもよりテンションを上げている胸の鼓動を押さえるため、そっぱを向いて、

「待ち合わせ？時間があるなら、映画でもどう？面白そうなのや

ってる。」

と、親指を立てて示した先の看板は『へたりあ』。

「あはは・・・」

彼女は、声を上げて笑った。

ナンパや下心から声をかけてくる男性あいてかどうか、見極める事が出来る年齢らしい。

「マックでお茶くらいなら、OKよ。待ち合わせは4：00だから。」

「了解。」

秀は、左腕のスウォッチの針を確認し、

「少しは気取って、Mr・DONUTs と洒落込もう。すぐそこだ。」

先頭切って歩いていく秀の後を、彼女は素直に着いて行った。

W A L F M E E T V A M P I R E < 3 > (後書き)

ご感想をお願い致します(ー¥)。。。。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9706/>

---

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 3 >

2010年10月15日19時22分発行